

シンポジウム「明石公園のリスタート ～みんなの声と手で～」
議事録

- 1 日時 令和6年3月20日（水）13:00～14:30
- 2 場所 明石商工会議所 7階ホール
- 3 出席した委員の氏名（県立都市公園あり方検討会明石公園部会委員）
飯塚由美子、上町あずさ、河本裕之、小林禎樹、高田知紀、嶽山洋志、辰巳太一、
中務裕文、丸谷聡子、村上裕道
（参考：欠席委員 兼光たか子）
- 4 コーディネーター
高田 知紀 兵庫県立大学自然・環境科学研究所 准教授
兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員
県立都市公園のあり方検討会 明石公園部会長
- 5 プログラム
第1部 報告
内 容：県立都市公園のあり方検討会 明石公園部会のふりかえり
報告者：高田知紀（明石公園部会長、兵庫県立大学准教授）
第2部 パネルディスカッション
テーマ：明石公園のこれから
登壇者：県立都市公園のあり方検討会 明石公園部会 委員

6 議事の概要

【第1部 報告】

高田知紀部会長より講演資料に基づき報告。詳細は講演資料のとおり。

【第2部 パネルディスカッション】

（高田知紀部会長）

後半のディスカッションにあたり、各委員から順番にコメントをいただければと思う。

（上町あずさ委員）

私は武庫川女子大学の建築学部の景観建築学科で教員をしており、そこでは、建物だけでなく、その周りの庭やランドスケープ等も一緒に設計をしている。植物には、癒し効果や、

コミュニケーション促進効果、教育効果など多様な効果があるので、植物の担当として、建物の周りに植物を配置しましょう、庭をつくりましょうといったことを教えている。

今回の検討会には、植物の専門家として参加させてもらい、本当に県民の皆様がこの明石公園の植物に価値を見出して、観察をしたり、癒しを受けたり、子供たちの自然教室を開催したりといったように、様々に活用されているという声をたくさん聞かせていただいた。

一方、樹木が大きくなりすぎて明石城跡の石垣を圧迫したり、鳥が種を運ぶなどして石垣から樹木が生えてきて石垣に悪影響を及ぼしているといったことも事実である。そもそも、雨の多い日本の気候自体が、植物の生育に適したものになっており、放っておくと、樹木が生えてきて森になってしまう。なので、明石城が400年以上前に作られて、もし何もせずに放置してきたとしたら、すでに石垣は崩壊しているはずである。今も石垣がしっかり残っているということは、昔の人達が石垣周辺の植物をしっかり管理し続けてきた成果である。

私たちも後世にこの石垣を残していこうと思うのであれば、今後もしっかり管理していく必要がある。私は日頃、学生に対して、植物は大切だと教えているが、植物を大切にすることも大事である一方で、しっかり管理していくことも同様に大事である。今後、みんなのみらいミーティングや管理運営協議会等で、石垣を守っていくこともみんなで考えていけたらよいと思っている。

(飯塚由美子委員)

私は、障害関係者の代弁者という立場で、この検討会に参加させていただいた。

現在、医療的ケアと重度心身障害のある子供たちを見ている「ゆりかご園」と、発達障害と知的障害の子供たちを見ている「あおぞら園」の園長を務めており、また、障害関係の事業所が集まって活動している「明石障がい者地域生活ケアネットワーク」の理事長をしている。聴覚障害や視覚障害、車椅子ユーザーの方たちともいつも普通に付き合っている立場から、あるいは、障害だけでなく、高齢者の方やママさんたちが使いやすくするにはどうすればよいかという視点で意見を述べさせていただいてきたところである。

その中で、こどもの村のインクルーシブ遊具を、あおぞら園の遠足で使わせていただいた。その時にすごく嬉しかったのが、10組くらいママさんたちが小さな子供たちを連れて利用されているところに、あおぞら園の子供たち30人余りがどっと家族と一緒に来るので、驚かれたらいけないと思って、今からあおぞら園の子供たちがたくさん来ると伝えたら、皆さんが嫌がることもなく本当に何の違和感もなく受け入れてくださり、一緒に遊んでも何の違和感もなかった。これはインクルーシブだなと本当に感じた。そういう意味では、まずは公園の中にインクルーシブ遊具を作っていただいたということがインクルーシブの実現に向けた大きな1歩かと考えている。

ほかにも、車椅子等が動きやすいようにという視点で、色々考えていかなければならないところもあるが、私としては、障害だけでなく、素敵なレンガ作りの県立図書館も非常に気になっているほか、歴史のある宮本武蔵の庭園等もあると聞いており、素晴らしい公園だと

考えている。今後、障害のある方達の代弁者というだけではなく、いろんな視点から発言、発信したいと思っているので、これからもよろしくお願ひしたい。

(嶽山洋志副部長)

私は、兵庫県立大学で教員をしており、専門は公園緑地計画ということで、公園を作ったり、公園ができた後の管理のあり方や使い方について研究をしたりしている。

今回、公園や緑地を専門にしている人間として非常にありがたいと感じたのは、市民の方々が声を上げられたということである。

通常、公園というところは、ある種の広場や空いている土地みたいな印象を持たれていて、そこに熱い思いを持っている人がいることや、管理し、働いている人たちがいるということは、皆さんはあまり気にされていないところかと感じている。そういったところに目を向けるきっかけになったという点は非常に大きいと思っている。

また、私は他の公園でも仕事をしているが、明石公園でこういう議論あったよねとか、うちの公園でも樹木のことを考えようとか、他の公園にも議論が波及しており、今回、明石公園部会が果たした役割というのは非常に大きいと感じている。

公園を作る場合、20世紀には何もないところに公園を作っていくというようなことが多かったが、今ではそんなことはなく、既にそこにいろんな自然があり、あるいはそこで活動されている方々がいる。そういう条件を前提に考えていかなければならないということが一般化してきている。そこで、自然環境がどうなっているのかという点では、まさに明石公園で活動されている方々が持っている情報はこれから非常に大事になってくると感じており、また、常に活動している方々の思いや、継続的な活動を今後どうしていくのかということも当然考えていかなければならない。

また、コミュニティがたくさん形成されるような仕組みができたということがこの2年間の1つの成果であるということは確かだが、樹木や自然環境が今後どのように継承されていくのかといったところも今後の論点の1つとしては重要で、その点は我々がしっかりと見ていく必要があると感じている。

時を同じくして、明治神宮外苑でも似たような樹木伐採の議論が行われており、新たに自然を回復するような場所を設けるといったような話もされており、私は、それを参考にしながら検討会で発言をしていたようなところがある。ただ、神宮外苑と決定的に違うのは、向こうは自然環境と商業活動とのバランスをどう取っていくかということが論点になっているのに対して、明石公園での議論は、石垣の保全と自然環境のバランスをどう取るかということで、石垣にも非常に文化的価値があるという点で違いがある。そういう資源同士のバランスをどう取っていくかということが、難しかったと感じている。

私が明石公園について、1000人ぐらいを対象にアンケートを取っても、ほとんど拮抗しているという状態で、景観の美しさだけを見ると石垣がいいよねという回答が多い一方で、自然や巨樹といったものは残すべきという回答も多く、同じアンケートの中でも矛盾するよう

な状態が見られた。これを解決していくための結論としては、樹木1本1本を見ていくとか、対話を続けていくということになっているが、実験的に樹木を残して、どれぐらい木が伸びたら石垣を崩すのかといった様子を見ていくことができれば、この2年間の議論を継承することになるのではないかと思うし、いろんな学びにも繋がっていくのではないかと考えている。石垣と樹木の関係だけでなく、いろんな実験エリアを公園の中に作っていくような、そんな新しいチャレンジを検証しながら進めていくような公園にしていきたいと思う。

（辰巳太一委員）

私は、一般社団法人明石青年会議所の2023年度の理事長を務めており、この検討会には利用団体という立場から参加をさせていただいた。私たちの団体は、毎年6月に開催させていただいている「時のウィーク」や、公園を中心とした事業やイベントにも携わっている。

そうした中で、ここ最近の明石公園は、利用がしやすくなったと感じている。去年は、手持ち花火や、バルーンをあげるようなイベントを実施した。今までであれば、花火は芝が傷むなどいろんな意見がありなかなか実現できなかった。

この検討会でも、利用者の方々に意見をいただいた会があり、様々な提案や意見が出ていた。今後、みんなのみらいミーティングが実施されていくということで、私たちの団体も、いろんな方々とアイデアを出し合い、マッチングしながら、よりよいまちづくりのイベントを実施できればと考えている。

また、今回の検討会では、樹木伐採の話が多かった。私は、どうしてもイベントを中心に考えてきたので、そういう目線で物事を捉えることがあまりなかったのだが、今回、植物の多様性等いろんなことを勉強させていただいたことで、今後は、より多様な視線でまちづくりに携わる団体になっていけるのではないかと感じている。

私たちの団体の中で観光業をされている方が、先日、インバウンドの方に奈良公園と大阪城公園と明石公園に行ったという方にどの公園が一番よかったかと尋ねると、実は明石公園が一番良かったと言われたらしく、それはなぜかと言うと、歴史もあり、自然もあり、何よりも他にインバウンドの方がいないからということであった。旅行先で同じ国の人に会うと、あまり外国に来た感じがしないが、そういう意味でも、明石公園はゆっくりできる場所ということである。

公園自体もそうだが、周辺地域も含めた地域活性化の新しい可能性を持っているのがこの明石公園だと思っている。みんなで利用をしながら、魚の棚など駅前周辺も活性化できる、そんな未来が実現できればよい。

（河本裕之委員）

私は、兵庫県高等学校野球連盟の理事であり、普段は高校教師として野球部の顧問をしているので、明石公園のスポーツ施設を利用する立場から参加させていただいた。実は、妻も高校教師として弓道部の指導しており、弓道場の方でも色々とお世話になっている。明石公

園には夫婦で大変お世話になっているところである。

私自身は、兵庫県の出身ではなく、東京の大学を出た後に明石に来て、今まで野球をしてきたのだが、東京の友達に明石というと、子午線の町、魚の町、橋の町、野球の町ということで、野球でも知られている町であるので、そこで野球をさせていただいていることは大変ありがたいことである。また、30万人の都市の駅前で、これだけ緑に囲まれた球場というのは全国的にもないのではないかと思っている。

また、野球という点で、まちづくりにも貢献できるチャンスはあると考えている。明石球場は、全国から集まる軟式の全国大会の会場になっており、全国から野球ファンが集まる。また、今年は6年に1回の近畿大会が開催される。これは近畿だけだが、たくさんの野球の強豪校が集まり、6年前には、根尾昂選手の大阪桐蔭高校や小園海斗選手の報徳学園が活躍した大会が明石球場で開催された。12年前には、藤浪晋太郎選手の大阪桐蔭高校が来て、その際には地元の明石高校が智弁和歌山高校を破るといような快挙もあった。ベスト4まで進出して、準決勝で大阪桐蔭高校に敗れてベスト4で終わってしまうのだが、そういったことで、野球で街を盛り上げていくということもできるのではないかなと思う。

また、普段、私は高校で理科を教えており、この検討会の議論で出てきた話題は、授業のネタにも使わせていただき、随分勉強もさせていただいた。また、明石公園のこれからのあり方は、明石市のまちづくりにも関わってくる部分かと思っており、そこで役に立つことがあればと考えているので、今後ともよろしくお願ひしたい。

(小林禧樹委員)

兵庫県の植物誌研究会、明石公園の自然を次世代につなぐ会の代表を務めている。樹木伐採については、当初からかなり喧喧諤諤でやってきた経緯がある。最終的に、県は新しい管理基準を作られており、それは非常に評価できるものではないかと思っている。その基準では、樹木1本1本を丁寧に見て、切るか切らないかを決めていくということである。その際の調べる範囲は石垣から5メートルということで、こだわりがまだ残っているのだが、おそらくそれは、石垣を色々補修なり管理していく上で、そこにある樹木が邪魔になるという管理上の問題があるのかなと思っている。

また、明石公園では、県の方からゾーニング図Bという考え方が提示された。これは今後、明石公園の自然をどう作っていくかという1つの目安になるような画期的な図であり、非常によいことであると感じている。この図をこれからさらに更新していくということで、これから色々役に立てていきたい。

皆さんもご存じかと思うが、公園に入っすぐ天守台の方を見たら、アベマキの高木が立っており、これは我々の推定では樹齢134年である。明石公園には巨樹はたくさんあるが、その中でもおそらく何番目かに入るくらいの古木である。この木は、当初の計画では切られることになっていた樹木であったが、幸い伐採がそこまで来る手前で中断されたために残ったという経緯がある。我々は明石公園の過剰な樹木伐採からなんとか守られた、守ることが

できた象徴的な木だと捉えて、これを大事にしていきたいと思っている。

また、気づかれている方もいるかもしれないが、東丸の下に、ブロックを積んでライトアップ用の配管をしている場所があり、それが非常に不細工で景観を壊しているため、検討会の中で指摘をさせていただいた。県は早速対処され、地下に埋めるという工事を進めており、いずれコンクリートのブロックが全部地下に埋まることになる。そういう対応を素早くやっていただけたということは、検討会の1つの成果ではなかったかと思っている。

(中務裕文委員)

私は、明石公園に隣接する行政の立場として参加させていただいた。

まずは、シンポジウムの開催にあたり、高田部会長、嶽山副部会長、各委員の皆様、そして兵庫県の事務局にこのような貴重な機会をいただいたことをお礼申し上げたい。

明石公園に関しては、樹木伐採を契機として、この公園の存在意義やこれからのあり方を検討するというところで、令和4年7月の第1回を皮切りに、2年間にわたり第14回まで開催されて、今日のシンポジウムを迎えている。その中で、私なりに印象に残った点が5点ある。

まず1点目として、明石公園は、明石城の歴史とともに歩んできた公園ということで、その歴史と文化の重要性を感じたという点である。明石城の歴史や地域文化が公園のあり方にどのような影響を与えてきたかということに関して、活発な議論が重ねられたことから感じるところである。

2点目は、持続可能な公園管理についてである。特に樹木伐採については、環境への影響を最小限に抑え、公園の美しさや機能を保つための持続可能な管理戦略について検討してきたところである。

3点目は、地域との連携についてである。検討会では、地元コミュニティとの連携や民間活力の導入についても活発に議論されてきた。

4点目は、利用者体験の向上ということで嶽山先生の実施するプレーパーク、あるいは全ての人に優しい公園ということで、インクルーシブ遊具の導入などについて議論してきたという点がある。

そして最後に5点目として、未来の展望に関して、明石公園みんなのみらいミーティングにおいて今後も継続して明石公園のあり方を検討していく枠組みを作ったという点がある。

このような議論を丁寧に行い、行政側の視点だけではなく、住民目線としての意見や提案を取り入れながら様々な視点から議論を重ねることができたものと感じている。特に、公園利用者へのヒアリングは、公園の将来に向けて様々な視点からアイデアが出され、明石公園の魅力を最大限に生かそうとする姿勢や、住民が本当に求めるニーズを把握できるような貴重な機会であったと思っている。今後、これらを考慮したより良い計画が進められることに期待したい。

我々もそうだが、行政は、目標とする完成時期に事業を完了させるということを命題として業務を推進している。そのために、住民の求める形を突き詰められないまま先走ってしまう

うということがないよう、改めて反省させられる機会でもあった。

時間を要するかもしれないが、この検討会のように、計画段階から地域の方々と共に進めていくことで、公園への愛着や賑わいづくりにつながっていくように感じた。その上で民間活力を取り入れられるなら、それも1つの活性化の方法ではないかとも思っている。

今回、我々の業務にも大いに参考にさせていただけるような検討会に参加させていただいたことに感謝申し上げたい。

(丸谷聡子委員)

本日は、休日にこうして多くの方にご参加いただき感謝申し上げます。本当に小さなお子さんや、若い方もたくさん来られていて、本当に嬉しく思う。

私は、昨年5月に市長に就任し、この検討会には、6月の第9回から委員として参加させていただいている。しかし、1回から8回までも全て傍聴し、ヒアリングでも、意見を聞いていただく側として参加してきたので、おそらく、誰よりもこの明石公園に関しては詳しいのではないかと自負している。

それはなぜかと言うと、明石公園を子どもたちの自然体験のフィールドとしてずっと使ってきた経緯がある。その中で、2018年に樹木伐採が始まった。当時301本、2019年には313本、この時は築城400年もあったので、そういった伐採もやむを得ないのかなと思っていたが、築城400年を終えた2021年にも630本の樹木が伐採された。その頃から子どもたちが自然観察をしていた樹木も切られ始め、これはどうしたらいいのかと思っていたところ、子どもたちが観察をして名前もつけていた樹齢154年の樹木が切られた。県の方に伐採が行われた議論のプロセスを聞いたところ、公文書がないとか、情報公開請求をしないと教えてもらえないという状況があり、同じような思いを持っていた市民の皆さんと声を上げさせていただいたところである。こういったことがなければ、私は、市長としてここにはいなかったのではないかと思うような経験をさせていただいてきた。

その中で、明石公園というのは本当に、自然だけでなく、歴史、スポーツ、それから皆さんの健康や癒しなど、いろんな意味で親しみを持たれており、みんなの公園として、すごく大事にされている公園だということがわかったため、なんとかこの公園をいい形で未来に繋いでいける方法はないかということで、声を上げさせていただいた。

明石市としては、いち早くこの明石公園に関するプロジェクトチームを立ち上げ、この検討会が発足する前に、スポーツ関係、自然関係、そして史跡関係、観光関係から意見を聞き、それを、第1回検討会で、参考資料として提出させていただいたという経緯がある。

そういったことも踏まえて、この検討会を14回重ねていただき、第一野球場では長寿命化の改修工事、また、陸上競技場では第3種の公認陸上競技場として、必要なトラック舗装の改修工事を行ったり、スタンド撤去等必要な施設の更新を進めていただいたということである。

そしてまた、自然環境の保全については、石垣や櫓等の史跡だけでなく、公園内の樹木も明石公園の価値を高める資源と捉え、基本的には、伐採ではなく剪定で対応する、剪定で対

応することが不可能な場合は、関係者と合意形成の上、1本1本確認した上で伐採を行うというルールが決まった。これは本当に大きなことだと思っている。

また、今後の活性化の中については、既存の活動の継続とさらなる発展を目指すということと、新たな利用者、市民、民間事業者の参画や新たな手法を取り入れようということ、そしてその中で、公園管理の運営やルールについて協議する場として、みんなのみらいミーティングを設置するということで、高田先生が中心となって今後進めていただけるという方向性がしっかり決まったということは本当に大きなことである。

こういった合意形成を進めながらまちづくりや公園の管理を進めていくということは、明石市にとっても先進的な事例になったと考えており、対話、共創を進めていきたい私としても本当に大きな力になったと思っている。

過去の歴史を紐解くと、明石公園では何度もいろんな危機があったのだが、その都度、救世主が現れて今の明石公園が受け継がれているので、そういう歴史を繰り返さないように、ここにいる小さな子どもたちのためにも、未来にしっかり明石公園をいい形で繋いでいけるように、私たちもこれから仕組みを作っていけたらと思っている。

(村上裕道委員)

京都橘大学教授としてこの検討会に参加していますが、私は、元々、国宝・重要文化財文化財建造物の修復設計を専門に行う財団で働いていた。その後、兵庫県教育委員会に転勤、文化財課で25年間勤めた。その間、阪神・淡路大震災の際には文化財の修理全般を担当した。

震災時の明石城の石垣の壊れ方は、経験したことの無い規模の壊れ方であり、本当にひどい状況だった。皆さん、あまりご存知ないと思うが、当時、明石城の石垣は文化財ではなく単なる公園の石垣だった。しかし、国交省の公園緑地課から文化財と同レベルで直すならば補助すると言っていたら、文化財の価値を毀損しないように修復したところである。当時の国交省の担当官、文化庁でない技官が重要文化財の指定の有無にかかわらず、文化財価値を認識していたことをしっかり認識する必要がある。

ただし、予算の都合上、当該年度、翌年度、翌々年度の3カ年までしか仕事ができなかった。その間にできる分だけとにかくやろうということで、いろんなところをお願いして、全国の城石垣の修復工事を全て中止してもらい、石工さんには明石に集まっていただいた。そこまでして修復作業を行なったが、被害の規模が大きすぎたために7割弱程度しか終わらず、まだ傷んだままの部分もある。全国からそれだけの協力を得て修復した結果、今の明石城跡があるということをご理解いただければと思う。

なお、石垣を修復する際には、当然、職人の安全管理を考えなくてはならない。明石城のような10メートルを超える高石垣の場合、法律の規定上、修復した石垣の背後は法面を作るため、石垣の先端から内側に大体5～6メートルの土は、一旦、削除されている。石垣先端から「5メートル」という言葉の意味はそういう経験に基づくものである。

文化財分野における保存・活用の考え方は、今後100年という超長期の想定に基づき価値判断をしている。日常の感覚からずれている部分があり、調整を必要とすることは承知している。

私が文化財保護政策の分野を担当していた令和元年に文化財保護法の改正をしてもらった。文化財の保護（保存・活用）とは、文化財自体の本質的な価値の保全だけでなく、社会的価値や経済的価値、そして地域の諸価値の保存・活用も想定し、その全体を考えた上で、どうやって文化財を残すかを考えなければならないと、保護の考え方を整理してもらった。

当然、この明石市でも、その法律に基づき、認定文化財保存活用地域計画を策定し、市内の文化財をどう保護していくかを、住民や商工関係、観光関係等様々な方に参加してもらって議論を始めた。

また、保護法の改正直後の令和2年には、「史跡明石城跡保存活用計画」を策定している。同計画には、石垣が壊れたら、先ほど述べたような修復工事が必要になるということや、生物多様性を守るためにはモニタリングをしなければならないということまで書いている。そうしなければ全体としての価値が保全できないことを書いている。ただ、文化財の世界は、狭い世界で話し合っている部分があり、そういった内容が認知されない嫌いがあったということは反省も込めて私どもは感じているところである。私自身は、今後、いろんな時間軸を持った様々な方が多様な視点から話し合う中で明石城跡のあり方が定まってくることが1番大切だと考えている。そういう意味でも、この検討会は非常に価値があったと感じている。

（高田知紀部会長）

本日は残念ながら欠席されている兼光委員からコメントをいただいているので、代読させていただきます。

（兼光たか子委員）※高田知紀部会長代読

2020年11月、二ノ丸、シラカシ、ウバメガシ、コナラの伐採。

2021年、西側の石垣周りの樹木伐採。3月、ブゲンゾウ八重咲きの品種があり自然観察に利用していました。8月、石垣近くの樹木を伐採し石垣を保全。稲荷曲輪の樹木が伐採され明るい空間となり、カラスザンショウ、オオイヌタデが繁殖しました。また、稲荷曲輪で実のなるヤマモモが伐採されました。

2022年、急な坂道のサクラ植樹でセミの羽化観察が出来なくなりました。

400年で植樹の伐採、人の安全の伐採でした。樹木を伐採した後の跡地を、どうするか検討してほしいです。堀の周りの樹木は残し、明石城である意味を伝えて行くものだと思います。

子どもの村で、雨やどりをする所が少ないと感じました。

観察会をしながら簡単に伐採されて、環境生き物を無視している人間の心を心配しました。

（高田知紀部会長）

兼光委員は、これまで明石公園で子供たちと一緒に自然観察をされている立場から検討会に参加していただいて、その中で樹木が切られていく様子をこういう風に見ておられた。その中で、木を切ると、その木がなくなるだけでなく、そこを使う人や、あるいは切った人の心にも影響を及ぼしているんじゃないかということをお心配されているコメントであると受け取っている。

委員の皆さんから、コメントをいただいたので、これからは自由に発言していただければと思う。まずは、せっかく会場の皆さんに書いていただいた質問を読み上げたい。

(参加者からの質問)

子育ての町として人口が増加した近年、子供たちが元気に遊べる公園としての明石公園はこれからも維持されていくことを願うばかりです。

一方、単に緑を感じられる公園という姿だけでなく、人の交流が生まれ、ビジネスの種が生まれるような刺激にあふれた場や、クリエイティブな発想を育むことができる場として機能や設備を整えられれば、もっと多くの市民の熱量を集められると思います。

そのような公園活用の可能性はありますでしょうか。

(高田知紀部会長)

子供たちが遊ぶ場、憩いの場、緑を感じられる場、人が交流して、新しいビジネスのチャンスが生まれる場、さらにそこで創造的なアイデアが生まれる場としての明石公園を考えていきたいという、そういうご意見だったかと思うが、この辺りどうか。まずは嶽山委員、こういう公園の可能性について。

(嶽山洋志副部会長)

兵庫県が管理する都市公園は全部で15か所あるが、その中で、これだけ人々が住んでいる真ん中にある公園というのは本当に明石公園ぐらいではないかと思っている。

そういう意味で、多様ないろんな機会を公園の中に持ち込むということは、非常にやりやすいのではないかと感じる。

これは、私が授業でよく言うことなのだが、子供たちが接している大人の多様性というものもかなり低下してきており、親子と祖父母、学校の先生、塾に行っている子は塾の先生、ぐらいの接点の中で子供たちは育っている。最近では、体験学習等に力をかなり入れることで地域との接点も増えてきてはいるが、よくよく考えると、非常に限られた大人との接点の中で子供たちが成長しているという状況が今の日本にはある。そうした中で、子供たちが多様な大人に接する機会を持つことができる可能性が高い空間は公園であると考えている。いろんな職業の方、いろんな技術を持っていたり、経験を持っている人たちに公園に入ってもらい、子供たちと繋ぎ合わせるようなパークコーディネーターのような存在が出てくると、子供たちの成長や、将来なりたい職業みたいなものもかなり変わってくるのではないかと

と思っており、まさに今質問いただいた方の言うような形での公園づくりを私は目指していきたい。

私のプレーパークは、子供たちに遊びを提供するというだけではなく、その地域の方々、大人の方々にも入ってもらって、その方々と子供が交流するような機会を持たせていくことを意識して活動しているというところが特徴としてある。そういう場所を明石公園の中にこれからも作っていこうということを兵庫県と話しているのです、ぜひ皆様にも参加していただけるとうれしい。

(高田知紀部会長)

ビジネスのチャンスや種が生まれるような場所という点では、辰巳委員、明石公園の可能性はどうか。

(辰巳太一委員)

老朽化した図書館など、そういった部分をしっかり使っていけばまた面白いものが生まれるのではないかと思います。また、どこに行ったら誰々に会えるみたいな、ビジネスのたまり場が明石公園の中にあればとても面白い。

明石公園に可能性はいっぱい詰まっているので、やり方1つでどんどん変わっていくのではないかと。コロナ禍をきっかけとして移住する方も増えているし、ビジネスがどんどん生まれてくる場、子供たちが交流できる場など、もっと活用されて、広がりがどんどん生まれていけばよりよい場所になるのではないかと考えている。

(高田知紀部会長)

ビジネスマンが公園に行ってちょっとおしゃべりする、そういう、サロンのようなことができるとうれしい。質問いただいたように、そういう種が生まれるような場所が明石公園にできるとよい。

今日印象的であったのが、河本委員の、高校野球がまちづくりに繋がるんじゃないかという意見。明石が高校野球の街であるという認識が浸透しているのであれば、それが新しい明石公園のビジネスにも繋がっていく可能性はあるか。

(河本裕之委員)

可能性は大いにあると思っている。

例えば、昨年の軟式野球の全国大会では、北海道から来られた方、九州から来られた方に、観光協会からいただいたパンフレットを配布して、こんなところにこんなありますよと案内をした。

明石には野球で来て、全然観光する気はなかったけれども、ちょっと回ってみようかと思うような、明石公園を訪れた方に駅の反対側へ回っていただくような仕掛けを作っていくこ

とで、港エリアや天文科学館エリア、あるいは東側の古いお寺等、周辺も含めて色々な回遊の仕組みを作ることはできるのではないかと考える。

（高田知紀部会長）

先日、MBS ラジオを聞いていたら、高校野球に詳しい芸人のかみじょうさんという方が、明石球場の、球場内にある売店の名物のメニューの話がされていた。やっぱり高校野球好きの人たちにとっては、明石球場は聖地なんだということで、可能性を感じた。そういう、こう使っているからこそ実感できている明石公園の価値というものと、さきほど辰巳委員のおっしゃった、アイデアが拾える場所というのが一緒にあったりすると、また新しい動きが生まれていくかもしれない。そのためにはやはり一工夫必要で、嶽山副部会長がおっしゃったような、人を繋ぐようなコーディネーターを設置していくということがすごく重要な点になってくると考える。そういった議論は今後、明石公園の活性化という点では大事なポイントになってくる。

ご質問いただいた方、そのような公園活用の可能性は大いにありそうである。

今までの展開で、一言加えたいということがあれば。丸谷委員。

（丸谷聡子委員）

今の NHK の大河ドラマ「光る君へ」に関連して、明石には源氏物語に関するいろんな名所が南側にあるが、それを作ったのが五代藩主の松平忠国ということである。本来、明石と源氏物語とは「明石の君」ということで謂れはあったのだが、そこを源氏物語と繋げたのが松平忠国で、私も最近知ったのだが、日本最古のテーマパークを作ったとも言われているということである。そういった柔軟な発想を持つ人が明石城にいた。

前回のみらいミーティングでも明石公園はクリエイティブな場がいいんじゃないかという意見もたくさん出ていたので、そういう新しいものと、今までの古い歴史に加えて、92 種類もの貴重な生き物が暮らしている明石公園が、うまく融合していくということがこれから大事になると実感している。

（高田知紀部会長）

この 2 年間、明石公園の議論に参加する中で感じていたことだが、そういう、掘れば掘るほどいろんな魅力と価値が出てくるということが明石公園の魅力である。1 つの言葉で表せるようなものではなく、複雑で、その時々いろんな姿を見せるということが明石公園の重要な魅力なんだろうと思う。そういったことを頭に置きながら、一元的な価値で測るのではなく、多面的な明石公園の価値を評価していくような指標をつくることも、今後、明石公園の管理をしていく上で大事な作業になってくると考える。

その中で、嶽山副部会長がおっしゃったように、明石公園の場合は、価値と価値、資源と資源の間のコンフリクトが難しいポイントである。単純に自然環境保全か開発かということ

ではなく、文化財、自然、利用というようにいろいろな価値があり、あるが故にその間で対立が生じるということも明石公園の難しさである。そうした点について、文化財保護の観点から、村上委員、自然と文化財との共存に関する大事なポイントや、他の事例で参考になるようなことはあるか。

（村上裕道委員）

ちょうど今、姫路城の保存活用計画を作っている最中だが、樹木管理は当然のこととして、バリアフリーやデザイン等、世界遺産でさえ、どうしようという議論をしている。なので、今ここで話しているような議論は、当然のことだと考えている。そういうことを考えていかなければ、文化財そのものが存続し得ないからである。私は、こういう風にみんなで考えていくということが本当に大切な時代になったと感じている。

一方で、みんなで考えるということは、逆に、明石城のどの部分は触つたらまずいとか、そういったことも一般の方が理解しているということが重要になる。専門家だけが考える世界はもう終わり、大事なものはどこだということをみんなで特定していかなければならない時代になってきている。フリーライダーではいいものは得られないということでもある。

（高田知紀部会長）

専門家に任せていたら自分たちのいいまちができる、公園ができる、文化財を保護できるというわけではなく、大事にしたいものがあるのであれば、自分でアクションを起こさなければならない、そうしなければ守りたいものが守れないというようなこともある。そういった意識をやっぱり市民1人1人が持つことが重要である。今回、市民の声をきっかけに検討会が立ち上がったということで、そのための場や仕組みというものを明石公園で作っていくということも、この2年間で議論してきたことかと思っている。

自然環境保全の観点で言うと小林委員はどうか。先ほど、公園にシンボルを残すということや、ゾーニングBの考え方が画期的だということを書いてくださった。石垣との関係では、樹木1本1本を見て決めていったという経緯も踏まえて、なかなか判断するのが難しい部分もあるが、今後、こういう考え方をもちながら、石垣周辺の樹木を見ていけばよいといったお考えがあればお聞きしたい。

（小林禧樹委員）

明石公園は、これだけの街中に桜堀の辺りを中心として、昔からほとんど手付かずに近い自然が残っている。ため池には昔はオニバスが生えていたなど、より多くの植物があり、今では考えられないような環境があったことは間違いない。

剛ノ池の周辺などではどうしても人の手が入ってしまっているが、さらに奥の子どもの村周辺に行けば、まだまだ自然が残っている。これからも、いろいろな形でイベント等していけばよいと思うが、明石公園を訪れる人は本当に多様な目的で来て歩いている。その空気や

雰囲気、自然を感じながら、無意識のうちに森を感じている。それほど深い森ではないが、特に意識しなくても森を感じることができる場所が明石公園であり、私はすごい場所だと思っている。こんな駅からすぐのところに、単なる自然だけでなく、自然とまちと人間を繋ぐような何かがあり、それが明石公園を作り上げている。それが何なのかは分からないが、そういう要素を持っている公園はざらにはないと思う。

植物で言えば、西播磨の海岸地域の岩場に生息しているような植物が、明石公園の石垣に生えており、環境の変化の中でも残ってきたということで、いわば生物が避難する場所になっている。殿様が住んでいた城の石垣が、海岸の植物の避難場所になっているというのは、自分も面白い発想だと思っている。

(高田知紀部会長)

明石公園に関する議論をみんなですっていると、こんなところにこんな植物がいるなど、気づかなかったことに気づき、明石公園を見る解像度が上がっていく。私は1月の明石公園の虫取りイベントで、子どもが見つけた冬虫夏草を見せてもらった。そうした、すごく小さなローカルな部分に多様な価値があるということで、まさに明石公園を見る目が変わった瞬間であった。そういったことを知って明石公園のあり方について議論すると、それを知らずに議論するのでは選択肢が変わってくるので、やっぱりみんなで明石公園の解像度を高めて、その上で、ここはどうしようという議論をしないと、全然違った方向に行ってしまうと実感した次第である。

これからの公園の展開ということで、飯塚委員は、障害を持つ方だけでなく、ベビーカーを押したお母さんや高齢者の方まで、いろんな世代が交流するような公園を作っていけたらとおっしゃってくれたが、それに向けて、こういうことが実現できたらいいとか、こういうことを大事にしたらいいいんじゃないかという意見があればコメントをいただきたい。

(飯塚由美子委員)

障害のある方、子供たち、高齢者の方たちが住みやすい世の中は全ての人が住みやすいという観点で色々なことを変えていけば誰でも住みやすくなるということを確認している。

また、視点を変えて話をさせていただくと、私は、明石は本当に宝物の宝庫だと思っている。レンガ作りの建物に関しては、最近神戸も淡路もいろんなところをおしゃれにして、子供たちも遊べる場に活用したりしているので、図書館も狙いどころではないかと思っている。あるいは、武蔵の庭園についても、こんな有名人が関わっていると言うとすごく宣伝になるのではないかと思っており、加えて、有名な魚の棚や、海などもあるので、明石公園を活性化させることで明石全体が活性化するのではないかと考えている。

誰でもみんなが住みやすいところは本当にいいところなので、さらに明石が活性化するというのを非常に楽しみにしている。

(高田知紀部会長)

ここを実験的な場として、明石市、兵庫県、あるいは全国にも、インクルーシブで誰もが使いやすく住みやすい場のモデルケースとして、このやり方がいろんな場に波及していくような、そういう取組がこれからできるとよい。そういうことができる可能性のある明石公園なんだろうと思っている。

中務委員もどうか。今後、他の行政の計画作りにも明石公園の取組を活かせるんじゃないかとおっしゃっていただいたが。

(中務裕文委員)

加古川を代表する公園は日岡山公園である。権現湖パーキングエリアではハイウェイオアシス機能を持った公園を作ったり、加古川の河川敷では「かわまちづくり」と言う賑わいを生むようなスペースを作ったりしている。

そうした公園は駅からのアクセスが弱いのだが、明石公園は駅からすぐ行ける公園ということで、立地的なポテンシャルは非常に高いので、良い意味での民間の活力も十分生かしていけるのではないかと思っている。今後、みんなのみらいミーティングなどで十分に議論を重ねながら、活用方法を取り入れていければよいのではないかと感じている。

(高田知紀部会長)

1時間半という短い時間の中で、言い足りないこともあったかと思う。参加いただいた皆さんにせっかく書いていただいたコメントも全部は紹介できなかったが、第1部のプレゼンテーションでも言ったように、明石公園の本当の対話っていうのはこれから始まる。

今日は部会からの報告と、これからの展望に向けてというシンポジウムであったが、本番はこれからということで、「リスタート」というタイトルにしている。なので、今日感じたことや、明石公園でこんなことができないかという疑問、やりたいことなどがあれば、ぜひみんなのみらいミーティングに来ていただき、思いの丈を自由に語っていただけたらと思う。

部会の委員の皆様には、この2年間参加いただき感謝申し上げます。多様なメンバーで多様な視点から議論をしてきたことで、明石公園の新しい展開を作っていたものと実感している。

この部会の運営にあたっては、兵庫県から、当初、部会長の依頼を受ける際、私は行政と市民の間ではなく市民よりに立つがよいかと言うと、それでお願いしますと言っていた。兵庫県には、事務局として、本当に覚悟を決めてこの部会を運営していただいたことに会を代表してお礼申し上げます。

明石市の皆さんにも、関係する自治体として、明石公園の協議等に参加していただいた。

何よりも、明石公園のことを気にして、部会に傍聴に来てくださったり、意見交換会で発言してくださったり、あるいは、そういう場面ではなくても、どこかで明石公園のことを気にくださった方々が本当にたくさんいるということは、この2年間、私も実感してきた

ところである。そういった明石公園を愛して気にしている全ての人々に、感謝とお礼を申し上げるとともに、これからもよろしくお願ひしますということをお願いしたい。

最後に、私は合意形成を専門にしているのだが、なぜ合意形成を専門にしているかということをお話させていただく。経済的な価値や希少価値といったものは分かりやすい価値であるので、あまり話し合わなくても明らかなものである。ただ、明石公園で議論してきたように、そういうものでは測れない多様な価値が目周りの風景にはたくさんある。そういった見えていない価値を掘り起こして、まちづくりや公園づくり等、自分たちの暮らしに生かしていくためには、唯一、みんなで話し合うしかない。

みんなで話し合っ合意して、これは価値だよねという風に合意して、それを大事にしながら取組を進めていく、それが唯一の方法だと思っている。

明石公園にはまだまだたくさんの隠れた価値というものがあると思うので、それをみんなで話し合い、声に出して、共有して、これを大事にしようということをおみんなで合意しながら、1歩1歩、歩みを進めていくということをおこれからやっていきたい。勝手に明石公園が良くなるわけではなく、皆さんのこの半歩、1歩が明石公園をよくしていくと考えているので、今後も明石公園のことを気にしていただきながら、ぜひこういう対話の場に来ていただけたらと思う。

今日はお休みの中、皆さん足を運んでいただき感謝申し上げます。風が強くて寒いですが、帰りもお気をつけて、余裕があれば明石公園を少し散歩して帰っていただきたい。商工会議所からの景観は絶景なので、ぜひ見て帰っていただけたらと思う。

今日の、明石公園のリスタート。これからはスタートであるので、今後ともよろしくお願ひする。